

郷土資料を対象とする地名由来の検索支援システム

渡辺 拓生

地名というものは、土地の記録であり、その土地の将来の展望を表していると言える。こうした地名の由来を調査することで、土地の歴史やその土地の風俗を紐解くことができるのではないかと考えられる。また、こうした地名の由来を調査するためには、その土地の歴史や風俗を調査しまとめられている郷土資料を用いると良いが、従来では郷土資料を扱うとなると資料が保管されている現地の図書館へ赴く必要が生じたり、資料の該当箇所を見つけるためには書籍一冊を読み込まなければならないといった問題があった。また、デジタル化された資料の登場により、文献調査は機械化することが可能となった。

そこで本研究では、地名の由来を探索する際に人手で行われる手順を機械化することで、郷土資料内における地名由来の該当箇所を抽出し、表示する手法を提案する。その上で効率的な地名研究の文献調査の支援を可能にすることを最終的な目的とし、デジタル化された郷土資料を対象に、地名の由来の記載されている該当箇所を抽出し提示することで、地名研究の支援をすることができる手法の提案を目指す。

本研究では、文献調査の支援を目指すため、以下の手法を提案する。

1. 地名と NDC を使用し文献を絞り込み
2. 資料の全文検索結果を、目次を用いて絞り込み
3. 選択した資料内で絞り込まれた範囲内で由来や歴史が記載されている箇所を抽出

本研究の結果をまとめると、237 の地名のうち人手による予備調査では 146 件、提案手法による本調査では 122 件の地名が見つかった。つまり、予備調査ではつくば市の 61% の地名が見つかり、提案手法を用いた場合でもつくば市の 51 % の地名を発見できたという結果であった。予備調査と提案手法を比較した場合、検索対象となる資料数が 8 から 2 に少なくなったにも関わらず、比較的近い数値を出していることから一定以上の効果があると考えられる。

また今後の課題として、つくば市以外の地名に対しても汎用性があるのかの確認が必要となる。また、電子化した資料やその資料の探索、そして全文検索などを次世代ライブラリーという特定サービスに強く依存している点、辞書によるパターンマッチング以外の方法の検討が必要といったことが考えられる。また、本研究では地名由来の絞り込みの部分しか評価できていないため、ユーザーへの提示やこの手法による文献調査の効率化がユーザーの支援になっているかの調査も必要である。

(指導教員 高久 雅生)